

[特集]

後世に残したい、都市横浜の宝

[展示余話]

横浜市庁舎に見る“都市の記憶”

[資料紹介]

山手警防団第三分団団旗

日三日月六市濱横

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第34号 2021(令和3)年1月16日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜ふるさと歴史財団 〒221・0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453
題字/高橋健介 印刷・製本/株式会社 佐藤印刷所 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

企画展のご案内



震災復興記念の木杯 根岸利恵氏寄贈 当館所蔵

後世に残したい、都市横浜の宝 館蔵コレクション展

当館では、2003(平成15)年の開館以来、多くの歴史資料を市民の皆様からご寄贈いただきましたが、これらは横浜に生きた人々の営みを後世に伝える大切な宝物です。

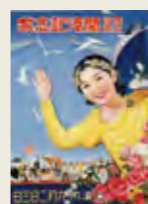
今回の企画展では、皆様から寄贈された資料をはじめ、当館がこれまで収集してきた資料を一堂に集めて展示し、震災復興から現在にいたる都市横浜の歴史を紹介します。私たち地域博物館の使命は、皆様から寄せられた資料をもとに、より豊かな地域の歴史を紡いでいくことにあります。関東大震災、横浜大空襲などの困難を乗り越え、発展を続けてきた都市横浜のあゆみを資料から感じていただければ幸いです。

【会期】2021(令和3)年1月16日(土)~3月28日(日)

寄贈資料の紹介

令和元年12月から令和2年12月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
根岸線全線開通5周年記念切符セット	1	齋藤明子
記念切符(一括)	6	齋藤明子
記念切符(一括)	28	小松富一
横浜専門学校関係写真	38	柳原家
郡制有終記念帖	1	富川拓未
小泉商店シルク衣装人形	1	小泉宗栄
日本貿易博覧会神奈川会場写真	1	小泉宗栄
ファチマの聖母少年の町記録写真	141	中野重義



●表紙図版
埋立祝賀開港記念祭記念絵葉書
1937(昭和12)年

横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分~午後4時30分(券売は閉館30分前まで)
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館時間等を変更する場合があります。

■休館日 毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料

上記企画展開催期間

企画展

一般300円/市内在住65歳以上の方、小・中学生150円
(企画展の観覧券で常設展もご覧いただけます。)

常設展のみ

一般200円/市内在住65歳以上の方、小・中学生100円

それ以外の期間

常設展のみ

一般200円/市内在住65歳以上の方、小・中学生100円
※毎週土曜日は小・中・高校生無料

※「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

『近代横浜を掘る 洲千島からひろがる都市のすがた』①

横浜都市発展記念館/編 定価819円+税

『一枚の切符から昭和のあゆみへ 思い出す横浜のイベント、ニッポンの風景』②

横浜都市発展記念館/編 定価1,000円+税

『焼け跡に手を差し伸べて 一戦後復興と救済の軌跡』③

横浜都市発展記念館/編 定価1,000円+税

『目でみる「都市横浜」のあゆみ(新装版)』

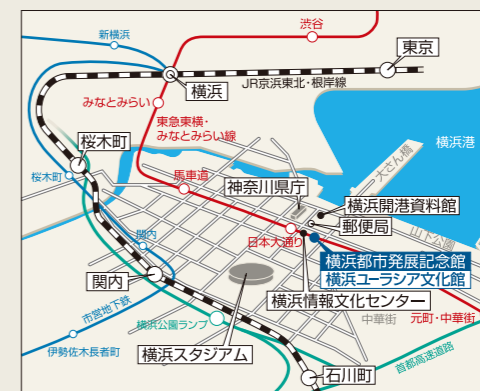
横浜都市発展記念館/編 予価1,239円+税

DVD

『映像でたどる昭和の横浜』シリーズ

定価各1,429円+税

第1巻・港とまちづくり/第2巻・都市の交通/第3巻・子どもたち



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J.R. 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅南口」下車徒歩1分
- あかいくつバス「日本大通り」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。



編集後記
明けましておめでとうございます。本年もよろしくお祈り申し上げます。昨年はコロナ禍のため、当館の事業も大きな変更を強いられました。未だ感染収束の見込みは不透明ですが、感染対策に万全を期して企画展などの事業を進めて参りますので、皆様のご来館をいただければ幸いです。(西)

【特集】 後世に残したい、 都市横浜の宝

館蔵コレクション展

2020(令和2)年度は、新型コロナウイルスの影響による臨時休館のなかでスタートしました。緊急事態宣言が解除されたのち6月2日に再開館をしましたが、今年度に予定していた2本の企画展はいずれも開催を延期することとし、夏の企画展では、会期半ばで臨時休館となつて終了した企画展「近代横浜を掘る」をアンコール開催しました。

コロナ禍での活動の再開は、あらためて社会における博物館のあり方について考え、そして当館が収蔵する資料を見つめなおす機会となりました。開館以来、当館では多くの歴史資料を皆様からご寄贈いただきましたが、これらは横浜に生きた人々の営みを後世に伝える大切な宝物です。

そこで冬の企画展では、館蔵コレクションをもとに都市横浜のあゆみを振りかえる展示「後世に残したい、都市横浜の宝」を開催することとしました。私たち地域博物館の使命は、皆様から寄せられた資料をもとに、より豊かな地域の歴史を紡いでいくことにあります。本特集では、企画展の各コーナーから選んだ「後世に残したい、都市横浜の宝」を紹介します。

開きで震災時と復興の状況が比較できるよう選ばれているものも多く、重太郎氏の編集意図が伝わってきます。横浜の震災復興を体験した一人の職員が、焼け野原からよみがえった都市横浜の姿を、絵葉書という媒体を使って自らの記憶として残した資料と言えるでしょう。

「横浜在住記念」 絵葉書アルバム

島田光重氏寄贈

「大正十四年乃至昭和五年 横浜在住記念」と書きの題字が貼られた絵葉書アルバムで、関東大震災の被災状況および震災復興を遂げた横浜の各所を写した絵葉書46点が貼り込まれています。

アルバム冒頭には、昭和6年5月1日の日付で「昭和五年勅令第百四十八号ノ旨ニ依リ帝都復興記念章ヲ授与セラル」と書かれており、この記述のとおり、「横浜復興誌」第4編巻末に掲載された「横浜市復興記念章交付者」のなかに、原所蔵者である島田重太郎氏(寄贈者の父)の名前が「横浜市書記」として確認できます。



震災で焼失した神奈川県庁と、震災後に再建された県庁

1 瓦礫からの復興

渡辺勝二郎市長に贈られた 眞葛焼花瓶

渡辺勝彦氏寄贈

1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災で、開港以来の都市は「目にして瓦礫の山と化しました。港町の市庁舎が焼失したため、桜木町の中央職業紹介所が仮の市庁舎に充てられ、その屋上で9月11日に開かれた緊急の市会にて、復興事業を市長の自由裁量とすることが議決されました。このとき市長を務めていたのが、内務省出身の渡辺勝三郎(1872-1940)です。

本資料は、渡辺勝三郎が1925(大正14)年4月に市長を退任したのち、同年12月16日に開催された感謝会で、横浜市復興会から贈られた

眞葛焼の花瓶です。震災後の9月21日に横浜の政財界の有力者たちによって設立された横浜市復興会は、復興事業を各方面から前進させる大きな力となりました。この花瓶の胴部分には、復興会会長の原富太郎(原三溪)による揮毫で、渡辺市長の功績に対する感謝の辞が記されています。眞葛焼というと、明治期に海外へと輸出された華やかな美術工芸品のイメージが強いですが、装飾ではなく言葉で埋め尽くされたこの花瓶には、関東大震災という災禍から立ち上がった横浜の人々の思いが刻まれています。



感謝の辞が記された眞葛焼花瓶

埋立祝賀開港記念祭 関係資料

関東大震災後の1927(昭和2)年6月、横浜港の拡張、臨海工業地帯の造成、市域拡張の3本柱からなる大横浜建設事業を打ち立てた横浜市は、翌年7月から守屋町・生麦地先の埋立事業に着手します。総面積61万9千坪からなる埋立事業は、1936(昭和11)年12月に完成し、3つの区画はそれぞれ恵比寿町・宝町・大黒町の町名がつけられました。

翌1937(昭和12)年6月の開港記念祭は、この市営埋立事業の完成を記念して「埋立祝賀」の冠をつけて開催さ

れました。横浜公園音楽堂での前夜祭に始まり、6月2日は700人が参加しての「開港行列」が盛大におこなわれました。続いて6月3日におこなわれたのが、当時「愛市の花」に指定されていたバラをあしらった「バラ行進」です。1935(昭和10)年に始まったバラ行進は、バラの生花で彩られた馬車5台が、市内企業の馬車・自動車とともに市内を行進するものでした。午前10時にホテルニューグランドを出発した行は、県庁前や伊勢佐木町を経由して横浜駅前をめぐるのち、午後には完成したばかりの市営埋立地へと向かいました。現在の国際仮装行列は、このバラ行進が原型となったものです。そして1989(平成元)年には、バラは横浜市の市花となりました。

II 海に広がる横浜 陸に広がる横浜



記念絵葉書



バラで飾られた馬車



市庁舎前でのバラ行進

戦地から 娘に宛てた便り

横川朱實氏寄贈

第二次世界大戦では、多くの市民が兵士として海外へ出征しました。軍事郵便は遠い戦地と内地を繋ぐ数少ない手段でした。寄贈者の父、長谷川清氏は1941(昭和16)年7月に召集され、甲府から満州に渡り、チチハル、スマトラ、濠洲方面を転戦。1944(昭和19)年4月16日に、乗船した輸送船が潜水艦の攻撃を受け、戦死します。

長谷川氏は多くの軍事郵便を家族宛てに出しており、娘に向けた絵入りの手紙や物語仕立ての手紙などからは、家族を想う兵士の気持がうかがえます。また、出征時や戦局が厳



長谷川清氏出征記念家族写真

しくなる頃の郵便には、死を意識した心境が露わに記されている内容の手紙もあり、兵士の死生観を感じる事が出来ます。

長谷川氏の戦死後、戦地からの便りは妻の富美子氏によって整理され、年代ごとに台紙に貼り付け大切に保管されていました。一般の市民が兵士となって戦争に参加することを余儀なくされた時代について、深く考えさせられる資料であるといえます。



家族に宛てた軍事郵便

IV 接收と戦災復興

日本貿易博覧会に出品された シルク衣装人形と会場写真

小泉宗栄氏寄贈



日本貿易博覧会神奈川会場写真

寄贈資料の人形は、絹織物輸出商である株式会社小泉商店が日本貿易博覧会に出品したシルク衣装人形です。戦後の占領政策の下、民間の貿易は原則禁止されていたが、1947(昭和22)年になつて制限付きの民間貿易が許可

され、翌年には日本船の遠洋進出が許可されました。この状況下で日本貿易の再生を願い、1949(昭和24)年に横浜で開催されたのが、日本貿易博覧会です。
小泉商店は、1937(昭和12)年に福井県の絹織物業、松文産業の關係会社として絹織物輸出入を開始し、戦時・戦後の統制期にも統制会社や公団の代行委任取扱業者として活躍したほか、戦後の貿易再開後は生糸・人絹(レーヨン)にも業務を拡大しました。寄贈写真には、日本貿易博覧会神奈川会場(現反町公園)における小泉商店の展示スペースに昭和天皇・皇后が行幸啓した際の様子が記録されており、画面右端に寄贈資料が写っています。敗戦の痛手から復興に向かう当時の商社の意気込みが感じられる資料といえるでしょう。

小泉商店シルク衣装人形



戦争孤児を保護した ボーイズホーム資料

(福) 福光会子どもの園寄贈

敗戦後、横浜は数方もの占領軍兵士が駐留する基地の街となり、占領軍が出す残飯や職を求めて、空襲などで家族を亡くした戦争孤児の子もたちが全国から集まりました。孤児たちは、野毛の園市などで浮浪生活を送ることを余儀なくされていましたが、彼らの救済に大きな役割を果たしたのが、民間の社会事業団体です。そのうちのひとつである日本厚生団は、戦後直後からテントを張つ



施設で発行された「ひまわり」

て子どもたちを保護していましたが、恒久的な施設の建設を目指し、1946(昭和21)年に戦争孤児の保護施設「ボーイズホーム」を開設します。中区日ノ出町の子神社境内に建てられた同施設では、様々な活動が用意され、子どもたちが荒んだ生活に戻らないよう配慮されていました。施設で月に一回発行されていた雑誌「ひまわり」には、子どもたちの施設での活動記録がまとめられているほか、施設に来る前の生活を記した作文が収録されており、過酷な浮浪生活の実態を知る貴重な資料となっています。また、子どもたちが路上で靴磨きを生業としていた際に使用した道具が残されていることも注目できます。



子どもたちが使用した靴磨き台

V 国際港都への飛躍

横浜市電の 記念乗車券

長谷川弘和氏旧蔵
岡田直子氏寄贈

切符に絵や図形、後には写真を加えた、いわゆる「記念きっぷ」は大都市の路面電車から始まりました。横浜市電では戦後、博覧会や祭事、祝典、スポーツ大会など、都市横浜をめぐるさまざまなイベントに際して記念きっぷを発行していました。ここではその一部をもとに(市営バスを含む)、国際港都への飛躍の一端をかいまみてみましょう。

一段目は「開港記念ハマ祭祝賀券」(1950年)です。戦後初めて開催された開港記念祭(ハマ祭)を祝したもので、幕末開港時の大老・井伊直弼の銅像と、横浜の港と街の風景が組み合わさっています。二、三段目は「開国百年祭記念」乗車券(1954年)です。幕末の開国(1854

年)から100年にあたるのを記念した式典が横浜公園でおこなわれ、二種類が発行されました。いずれも絵柄は黒船ではなく、現代の船舶が中心になっています。

四段目は「開港99年と国鉄根岸線祝賀みなと祭」記念乗車券(1957年)です。桜木町が終点だった国電の延伸(根岸線の建設)は、戦争で中断されていましたが、この年に着工が決まり、本券は開港記念のみならず祭とあわせ、それを祝したものです。ただし、開通時(1964年)には何も発行されませんでした。五段目は「横浜開港百年祭」記念乗車券(1958年)です。幕末の開港(1859年)から100年目にあたるこの年、横浜市はそれを記念する盛大なイベントを開催しました。式典には皇太子が臨席し、美空ひばりらによる歌謡大会、仮装行列や花電車の運転、そして本券の発行などがおこなわれました。



山手警防団第三分団団旗

山手消防団長 豊島世志男氏寄贈

第一次世界大戦以降、主要国の戦争は国家が総力を挙げて戦う国家総力戦の形式で行われ、一般市民が住む都市にも空襲が行われるようになった。空襲への対応は、公的な常備消防機関のみでは間に合わないことが戦前から認識されており、都市に住む国民が防空を担う「国民防空」体制の構築が求められた。横浜市では、明治27（1894）年に制定された消防組規則に基づき、三組（伊勢佐木、石川、山手）が編成された事を嚆矢として、消防組が地域の水火消防の任務を担っていた。しかし、日中戦争開戦後の昭和14（1939）年に警防団令が公布されると、消防組は警防団に改組され、警察の補助機関として従来の水火消防に加え、防空監視や警報発令、被災者の応急救護、避難所の管理などといった防空の責任を負うことになった。

今回紹介する資料は、山手警防団第三分団の団旗である①。山手警防団は山手警察署管内二区を管轄し、地域の防空消防を担った。警防団の団旗は、昭和16（1941）年に出された神奈川県訓令第51号「警防団旗取扱心得」の第一条によれば、「団旗は警防団の魂にして警防精神を象徴するものなるを以

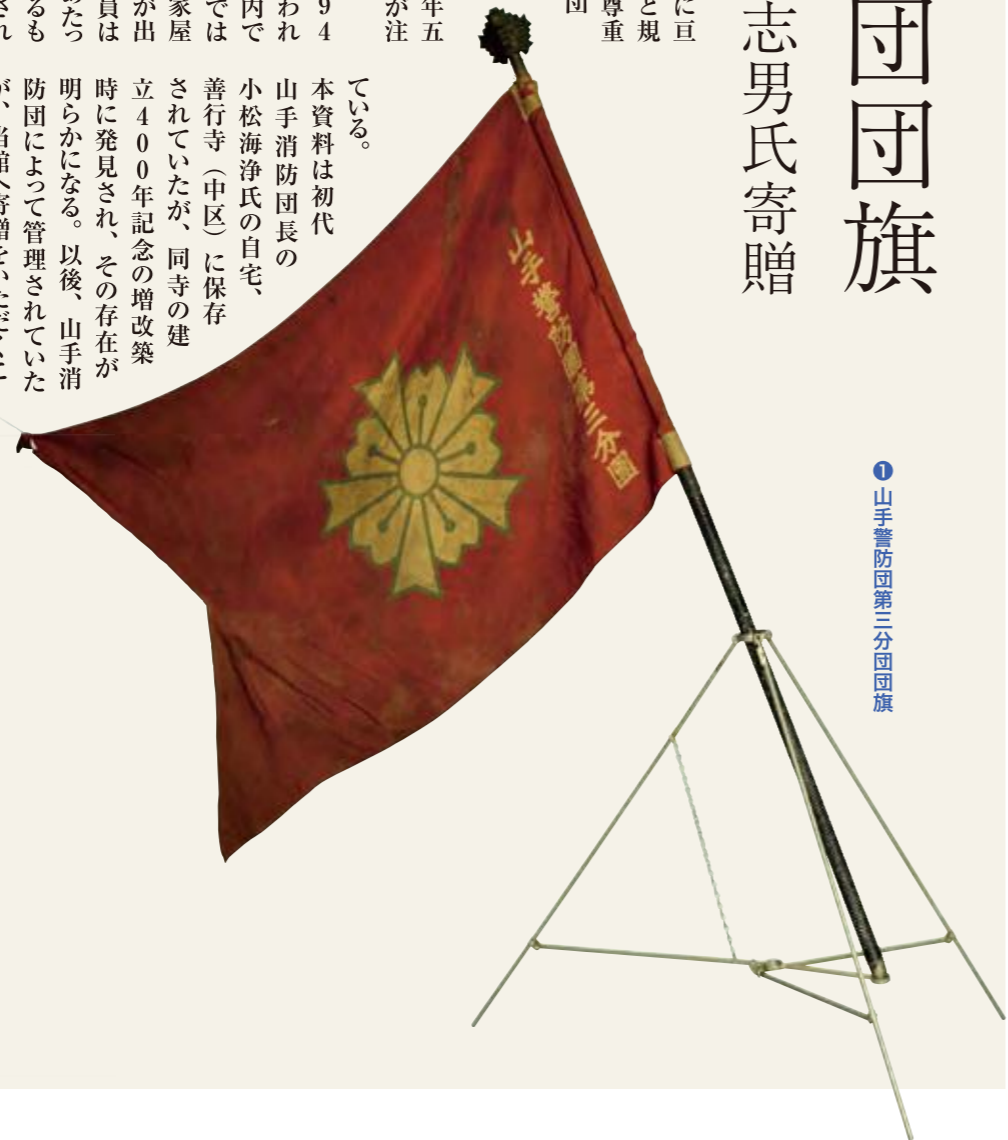
て其の取扱は鄭重に行ひ苟も粗略に亘らざる様万全の注意を為すべし」と規定されており、団のシンボルとして尊重される存在であったことが分かる。団旗は専用の容器に納めることも「心得」には記されているが、寄贈資料の容器には、箱蓋の表に「血染之團旗」②、裏に「昭和廿年五月廿九日」③と墨書されていることが注目できる。

資料に記されている昭和20（1945）年5月29日は横浜大空襲が行われた日であるが、山手警防団の管轄内でも大きな被害が生じ、警察の記録では死者506名、重症者86名、焼失家屋8500件、罹災者45000名が出たことが記されている。警防団員は空襲下において懸命な防空活動にあたりながら、空襲の威力は想定を上回るものであり、団員も避難を余儀なくされた。本資料は避難の過程で団員が命がけで守ったものと考えられ、その際に付着したと推測できる汚れが当時の状況の過酷さを物語っている。

警防団は戦後、昭和22（1946）年に消防団令が公布されたことにより消防団に改組され、この後結成された山手消防団が現在でも地域の消防を担っ

本資料は初代山手消防団長の小松海浄氏の自宅、善行寺（中区）に保存されていたが、同寺の建立400年記念の増改築時に発見され、その存在が明らかになる。以後、山手消防団によって管理されていたが、当館へ寄贈をいただくことになった。本資料は明治以来続く山手地区の地域消防の歴史の一端を伝えるものであり、地域の人々が防火消防に努めた証しといえる。また、地域の空襲の歴史を伝える資料としても極めて貴重な資料といえるだろう。

（西村 健）



① 山手警防団第三分団団旗

② 箱書「血染之團旗」



③ 箱書「昭和廿年五月廿九日」



てんていよわ
余話 展示

横浜市庁舎に見る “都市の記憶”

① みなとみらい大通りに面して設置された歴史サイン



② 大岡川石積み護岸



これらの遺構はいわば、横浜市庁舎の敷地に刻まれた「都市の記憶」であり、過去の歴史の積み重ねの上に現在の都市があることを私たちに教えてくれます。

（青木 祐介）

2020（令和2）年6月29日、横浜市の新しい市庁舎が供用を開始しました。関内駅前の港町1丁目から大岡川沿いの本町6丁目へと新築移転した市庁舎は、明治22（1889）年の横浜市誕生から数えて8代目にあたります。

当館では、この市庁舎建設地でおこなわれた洲千島遺跡の発掘調査の成果をもとに、企画展「近代横浜を掘る」を開催しましたが、展示準備と並行して、新市庁舎の外構部分に設置される歴史サイン①を監修しました。

た。新市庁舎の外構には、発掘調査で検出された遺構の一部が展示されることになっており、歴史サインでは、新市庁舎の平面図に発掘調査の図面を重ねて遺構の出土位置を示し、さらに古地図を用いて、開港期から震災復興期までの市庁舎周辺地区の変遷を紹介しました。

* 図版①～④は、横浜市都市整備局都市デザイン室提供

③ 航路標識管理所 煉瓦造導水管



④ 横浜銀行集会所 建物基礎



⑤ 関東大震災で隆起した地層

